
湯豆腐は絹か木綿か

深川辰巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

湯豆腐は絹か木綿か

【Nコード】

N8151I

【作者名】

深川辰巳

【あらすじ】

来日する大統領を警備することになったSPの山村達は暗殺計画の情報を入手する。

その暗殺手段とは「豆腐の角を大統領の頭にぶつける」というもの。未然に防ぐために山村達は立ち上がるが、その強大な目の前に次々と倒れる仲間達。

立ち上がれ！ 山村！

キング豆腐との戦いが始まる！

く揚豆腐編く

雑多な書類がいくつも山を作り上げている机で、山村はいくつかの資料に目を通しながら紫煙をくゆらしていた。

彼の灰皿の中に新参者を受け入れるスペースはなく、隣の川本が自分の灰皿を差し出す。

それが当たり前のように山村は新しい灰皿にタバコを押しつけていた。

「山村さん。いよいよ大統領の来日は明日ですね。何としても警備を成功させましょう！」

「意気込みは良いが今朝入ってきた新しい情報については把握しているか？」

山村は新しいタバコを口にくわえてライターで火をつける。

「ええ、何でも大統領を暗殺しようともくろむグループが既に東京に潜伏しているとか……」

川本の答えを聞いているのか、山村は変わらず中心にでかかとおで囲まれた赤い「秘」の文字が踊るA4の紙を引き続きめくっていく。

しかし、最後まで読むことはなく机の上に放り投げた。

「結論から言おう。奴らの手口が分らん。こうなるとあらゆる対策を練らなければならないが時間と人手が足りん！」

「オーソドックスに考えれば銃でしょう。大統領が通るルートには高層ビルがたくさんあります。そこから狙い撃ちする……単純ですが防ぐのは困難です」

「そんなことは分かっている。だからこそたくさんのSPをつけている。場合によってはその身をもって盾になる。」

しかし銃ならともかくバズーカならSPごと……
「バズーカ？ この日本でそんな……」

川本は身をのけぞるようにして、椅子に背もたれる。

「平和ぼけするなよ。大統領は核廃絶宣言をしている。核開発で儲けている死の商人がどれだけ不利益を被る？ 大統領を暗殺するためなら、否、再び儲けるためなら手段を選ぶと思うな」

「だけどバズーカともなると日本に持ち込むのは困難でしょう。銃なら上手に隠せるかも知れませんが……」

「そこだ。武器がなんなのか、どうやって調達するのかが分かれば……」

『いやあ、どうしたことでしょうね？ きちんと入荷はしているのですがすぐに売り切れてしまったんですよ』

ふと、テレビから流れてきた音声に山村は耳をひくつかせた。

「山村さん？ どうしたんですか？」

「静かにしろ……」

すっかり視線はテレビに釘付けになっている。

『不思議なこともあるものですね。東京中のスーパーやコンビニはおろか商店街の専門店からも豆腐が消えるなんて。』

誰かが買い占めているのでしょうか？」

昼のワイドショーは明日の大統領の来日よりも豆腐が棚から消えたことの方が大事なのだ。テロップは画面上に大きく表示され、繰り返し同じコメントが繰り返される。

「豆腐……大統領暗殺……」

徹夜続きで何日も剃っていないひげをさすりながら山村は考え込む。

川本は山村が何を考え込んでいるかが検討が突かず顔をのぞき込むが、その険しい表情は口出しできる雰囲気ではない。

「そうか……『豆腐の角に頭をぶつけて死ぬ』……やつらは豆腐で大統領を暗殺する気だ。くそ、盲点だったぜ！」

「な、なんですって！ 大変じゃないですか！ もう既に大量の豆腐が買い占められていますよ！」

「分かっている！ 行くぞ！」

「行ってくどこへですか？ あ、待ってくださいよ！」

「急げ！　まずは科学班のところだ！」

「あら、山村君。強面を一層険しい表情にさせてどうしたの？」

二人が入室すると、眼鏡をかけて長い髪を一つに束ねた白衣の女性が出迎えた。

「谷沢！　大統領暗殺の話は聞いているな。東京中の豆腐が買い占められていることは？　おそらく暗殺グループは豆腐の角を大統領の頭にぶつけるつもりだ！」

矢継ぎ早に次々と言葉を放つが、谷沢と呼ばれた女性は一つ一つに頷いていたが、最後は細い目を見開いた。

「何ですって？　それは大変じゃない！　それで私のところに来たのは？」

「東京中の豆腐が集まったらどれくらいの力になるのかを計算して欲しい」

「分かったわ。十分……いいえ、五分ではじき出すわ」

すぐさま谷沢はコンピュータに向かいキーボードを叩き始める。

小気味良い音がリズム良く部屋中に響き渡る。彼女の白く細い指の動きは正確無比、それでいてかつ迅速。まるでピアノリストが優雅に演奏しているかのようでもある。

最後に力強い音が響く。ちょうど五分。

「出たわ……とんでもないわね。約一億k_tだわ」

やや薄暗い部屋にディスプレイの灯りが彼女の顔を照らし出す、その表情は凍り付いたように固まっていた。

「一億……なんだって？　ノット？　分かるように説明しろ」

「Kill To_fuの略でk_t。読み方はノット。豆腐が何人の人間の頭に角をぶつけさせて殺せるかを表す単位よ」

「それが一億と言うことは……」

山村と川本の表情もこわばり始める。

「一億人の人間を殺せる力があるって事よ」

谷沢はこともなげに言うがその表情はあきらめにも似ている。

「何てことだ。大統領一人を暗殺するのに日本人を全滅させる気が？」

「谷沢さん。何とかならないんですか？」

「みつともないぞ川本。SPはいかなる時でも冷静でなければいかん」

「す、すみません。でも一億人だなんて……」

「そうよ、山村君。普通の人間なら当然の反応だわ。厳しすぎるわよ」

「SPは普通の人間じゃ困るんだよ。だが、谷沢。何かいい手はないのか」

「ないことはないけど……かなり危険よ」

「危険だろうと大統領を守る。それだけだ」

「あの頃と変わっていないのね。良いわ。教えてあげる。その代わり生きて帰ってくるのよ」

「約束は出来ないな」

「来ましたね。大統領専用機ですよ」

成田空港では大統領を出迎える首相の傍で二人を始め多数のSPが待機していた。

「川本。戦いは既に始まっている。大統領を一目見ようという物見遊山の気持ちがあれば……」

川本の耳に山村からの無線が入ってくる。

「その隙を突かれる、ですね。分かっていますよ。大統領の顔は後からテレビでゆっくり見ますよ」

「そうだ。それで良い」

そのとき耳をふさぎなくなるような拍手と歓声が沸き上がった。日本人皆が大統領の来日を歓迎している。

その意思表示をすべく集まった代表者達があるいは両国の国旗を振りながら、あるいは垂れ幕を広げながら、飛行機の着陸を待った。

「覚悟はできたか？ 川本」

「そんなものはこの職に就いたときから出来ていますよ」

「過ぎるくらい模範的な解答だ」

山村は満足げに笑みを浮かべた。

相手国の、そして日本のSPが飛行機から降り立つ大統領の周囲をぐるりと取り囲む。

「山村さん。僕たちの方が外堀ですか」

「当たり前だ。堀が埋められるのは格下からだ」

「山村さん！ あれを！」

川本が慌てて指さした先は大統領が通る予定の自動ドア。その上には黒板消しのいたずらよろしく挟まっている豆腐。

「ち、さっきまではなかったはずなのにいつの間に仕掛けられた？」

「山村さん。僕が先に行きます。そうそう。この仕事が無事終わったら。彼女にプロポーズするんです。もちろんプロポーズの言葉は『僕に毎日豆腐の味噌汁を作ってください』なんです。だから、奴らが許せないんです。豆腐を買い占めて暗殺の道具にする連中が！」

「おい、川本。今このタイミングでそんな話をするんじゃない。だいたい彼女がいるなんて一度も言っていなかったじゃないか」

「山村さん。万が一の時は後をお願いします」

「川本！ 縁起でもないことを言うんじゃない！」

大統領一行から先んじて自動ドアにたどり着いた川本。改めて豆腐がドアに挟まっていることを確認する。

「一億k t……」

川本は呟くとつばを飲み込むが、次から次へとわき出るつばで喉が渇く。

「負けるものか……僕には谷沢さんからもらった秘策が……あ！」

豆腐を手に取りうつとしたが水気が多く手が滑り角から頭に落ちてきてしまった。

そしてその場に倒れ込んだのだ。

「川本ー！ いや、今は大統領が優先だ！ 犯人がどこか近くに潜

んでいるかも知れない」

山村がそう呟いたとき青空に白い固まりが舞い始めた。

「自動ドアのトラップが失敗したら、直接攻撃か！ 大統領！ こちらへ！」

豆腐の正体を知らない相手国SPはなすすべもなく頭に豆腐をぶつけて斃れていく。

「恐ろしい……さすが一億k t……大統領早く！」

日本のSPは豆腐のことを知っているため動きを読み、かわしながら大統領の周りを固めて豆腐の発射源から離れていく。

「山村さん！ どうするんですか川本さんも……向こうのSPも……」

SP達もさすがに動揺を隠せないでいる。

「分かっている！ だが、まずは大統領を安全な場所へ……届かないと諦めたのか豆腐の直接攻撃はやんでいるな。だからといってこのままじっとしていれば相手が接近してくる可能性もある。危機からはまだ脱していないんだ。

それにしても大統領は何と堂々としていることか……」

「オー！ デイスイズトウフ！ イッツデリーシャス！」

「食べている……地面に落ちた豆腐を……何という胆力！」

「山村さん。どうするんですか？」

「まあ、慌てるな。谷沢から授かった秘策を出すときだ」

「秘策？」

「アイウオンスツソイソース」

「醤油が欲しいそうです」

「金山寺味噌ならある。渡しておけ」

山村はそう言って味噌の入った容器をそばのSPに放り投げた。
「なんでそんなもの持ち歩いているんですか？」

「好みだ」

「それで、秘策とは？」

「オー！ ミソ！ ベストマッチ！ デリーシャス！ ワンダホー

！」

「まあ、見ておけ！」

「山村さん！ 一人で行くなんて危険です！」

「お前らは大統領のそばにいろ！」

山村は飛び出し後には大統領と三人のSPが取り残された。

「ちよつと山村さん！ この状況でも大統領は豆腐食べています！

私たちも行きますよ！」

「お前達はダメだ！ 秘策は一つしか用意できなかった！ だから俺がやる！」

既に山村の姿は先ほど惨劇の起こった場所、即ち相手の射程距離内にあった。

「さあ来いよ。一億kもだと！ 今の俺は怒りに燃えている！ 俺を殺したかったらその十倍は持つてこい！」

山村が叫ぶと同時に、多数の豆腐が射出される。

「豆腐の角に頭をぶつけたら死ぬかも知れねえが、知っているか？

『豆腐にかすがい』って言うんだよ！」

飛んできた豆腐を的確に両手に持ったかすがいで打ち砕いていく。

「これが死んだ川本の分！ これが死んだSP達の分！ そしてこれが豆腐を食った大統領の分だ！」

叫びに合わせて拳を放ち豆腐の飛沫が宙を舞っていく。

「きかねえ！ きかねえ！ きかねえ！ 今の俺に豆腐はな！ 全て麻婆豆腐の具にしてくれるわ！」

山村の周りには砕け散った豆腐の残骸が転がり先ほどとは比べものにならない惨状が広がっていた。

「どうした？ 一億kとはこの程度か？」

豆腐の射出がやんだと思われる一瞬、なにかが飛んできた。

「無駄だ！ ……ぐわ！ な、何だ！ 今のは？ ……納豆、だと？」

「山村君！ 気をつけて！ 豆腐エネルギーが一力所に収束しているわ！」

山村のイヤホンに谷沢の音声が入ってくる。

「ふん……。納豆のねばねばで俺の拳の動きを止めるなんて小細工を……。だが、何が起ころうと残った左の拳で打ち砕いてやる！」
突然起こる地響き。肌で分かる。今までとは異なる豆腐の未知なる力。

「山村さん！ ビルの向こう！」

「こ、これは！」

「オービッグトーフ！ ビューリフォー！」

ターミナルビルの影から現れたのは体長十メートルに及ぼうかという巨大な豆腐。

「豆腐が集まってキング豆腐になりやがった！ これが一億k tの本当の力か！」

キング豆腐が少し動いただけで、轟音と共にターミナルビルが崩壊し、中にいた人々の悲鳴が辺りに響き渡る。

「てめえ！ まだ人を殺し足りないというのか！ 俺がてめえを殺す！ 両手の拳で×2！」

山村は両方の拳を天に向かって高く突き上げる。

「山村君！ 何をする気なの！ 今の右手は納豆でねばねばなのよ！」

「それがどうした？ ここで右手が一生使い物にならなくなってもこいつを倒す！ とっ！」

「山村さんが……。飛んだ！？」

「いつもより二倍高く飛ぶことで×2！」

「な、なんだ、あの回転は！」

「そしていつもより三倍の回転で×3！ 計十二倍の力だ！」

上空から身体を回転させて、かすがいを握った拳で豆腐へと突っ込んでいく。

「食らえ！ 『光の矢』！」

「すごい、山村君の放出するエネルギーは……。一億二千万k t……」

これなら一億k_tに勝てるわ！ 勝てるけど……！」

「氣象庁」

「午前八時四十六分。M五・八の地震が発生しました。震源地は成田空港付近です」

「山村君！ なんてこと！ 一億k_tのエネルギーと一億二千万k_tのエネルギーがぶつかり合えば……」

谷沢は呆然と立ち尽くす。川本が死んだときにも流れなかった涙があふれ出す。

「山村さん……」

「そんな……あの人が死ぬなんてあり得ない……」
「オーマイトーフ！」

衝撃で辺りにはにがり水の蒸気が立ちこめ、何も見えない。

周りの人間に分かること……。山村とキング豆腐が相打ちしたと言うこと。

「山村さんは守ってくれたんだ。大統領を、この日本を……いや、世界を！ その身をもって……うつつ……」

SP達はそれ以上声も出なかった。

「トーフ！ ミソ！ NATO！ ベリーデリシヤス！」

風に吹かれて蒸気が晴れてくる。そこには一人の男の影が立っていた。

「おいおい勝手にNATO軍に入れないでもらいたいものだな。俺はまだ生きているぜ」

「「や、山村君さん」」

谷沢がSP達が影のところへと駆け出す。

「生きていたのね！」

「俺が豆腐ごときで死ぬわけないだろ？」

そう言いながらも頭からは血を流し、左目をつむっている。右腕は明らかに変な形に折れ曲がっていた。

「強がっちゃって……心配したのよ」

「タバコ……あるか？」

「もう、こんな時に……」

「あははは！」

「A H A H A H A！」

こうして大統領暗殺計画は山村の活躍によって阻止された。

大統領はその後の日程を強行軍でこなし、最後には首相との共同声明を発表した。

「我々は核廃絶に伴い、代替の新興産業として豆腐の大量生産を宣言する」

この声明により核開発で儲けていた死の商人達は一齐に豆腐の製造に方向転換した。

だが一方で各国は豆腐の生産競争に邁進することになる。

これが後に「冷泉」と呼ばれる時代の幕開けであった。

そのことを今の山村は知らない。

「結局……絹なの？ 木綿なの？」

「決まっているだろ？ 卵豆腐さ……」

次回、卵豆腐編に……続く……

つま豆腐編

・No Title

雑多な書類がいくつも山を作り上げている机で、山村はいくつかの資料に目を通しながら紫煙をくゆらしていた。

彼の灰皿の中に新参者を受け入れるスペースはなく、隣の川本が自分の灰皿を差し出す。

それが当たり前のように山村は新しい灰皿にタバコを押しつけていた。

「山村さん。いよいよ大統領の来日は明日ですね。何としても警備を成功させましょう!」

「意気込みは良いが今朝入ってきた新しい情報については把握しているか?」

山村は新しいタバコを口にくわえてライターで火をつける。

「ええ、何でも大統領を暗殺しようどこかに豆腐を仕掛けたとの声明があったとか」

川本の答えを聞いているのか、山村は変わらず中心にでかかとおで囲まれた赤い「秘」の文字が踊るA4の紙を引き続きめくっていく。

しかし、最後まで読むことはなく机の上に放り投げた。

「どこに仕掛けたのが分からん。大統領の日程は予定通りに行うとのことだ。事前に豆腐を見つけ出して排除しなければ暗殺は成功してしまうぞ」

「ふふふ。お困りのようね。山村君」

部屋の扉が突然開くと、その向こうには黒いスーツを白衣で包み後ろで髪を束ねた眼鏡姿の女性が立っていた。

ヒールの乾いた音をリズム良くたてながら二人のそばへと歩み寄る。

「谷沢か。何か良い考えでもあるのか?」

「こんなこともあろうかと！」

じゃーんと自分で効果音を口にしながら谷沢は手のひらサイズの懐中時計のような物を二人につきだした。

「なんだ？ これは」

「何か白い点がいくつか映っていますけど」

顔をのぞき込む二人の姿に谷沢は満足げに笑みを浮かべた。

「ふふふ。聞いて驚く亡かれ、これは豆腐レーダーよ！」

「豆腐レーダーだと！」

「そう、前回の事件の時から開発していたの。」

ただ豆腐のある場所を示すだけじゃないわ。その豆腐が何k t (kill to fu) かまで表示される優れものよ」

「すごいじゃないですか！ それがあれば仕掛けられた豆腐がどこにあるかすぐに見つけられますよ！ 山村さん！ 早速出かけましょう！」

「うむ。谷沢。借りるぞ」

「いいえ、これはまだ試作品でいつ不具合が起きるか分からないから一緒に行くわ」

山村はすぐさま首を横に振った。

「危険だ。君を連れて行くわけにはいかない」

「大丈夫よ。豆腐レーダーがあるんですもの。近くに豆腐があると分かっただけでさ、さあ離れるわ」

「そうか、そこまで言うなら仕方ない。行くぞ！ 川本！」

「はい、準備は出来ています！」

三人を乗せた車は大統領の行程をなぞるように走る。

「この点は？」

「だめね。ただの豆腐よ。ーk t も無いわ」

「それじゃあこの点もか？」

「ええ」

川本が運転する中、後部座席で二人はレーダーの画面を確認していた。

「これは？ 少し大きいようだが」

「大きいと言っても五k tよ。大統領を暗殺するには不足な気がするわ」

「一k t有れば人を殺せるんだ。用心に越したことはない。川本、あのビルに向かってくれ」

「はい」

川本が大きくハンドルを切ったとき、谷沢が小さく悲鳴を上げた。「すみません、荒っぽかったですか？」

「違うの。反応が消えたわ」

「消えた？」

急いで山村がレーダー画面を確認すると、確かに先ほどまであった点が消えていた。

「どういう事だ？」

「おそらく、食べられたのだと思うわ」

「そうか……豆腐だからな」

「山村さん、次はどちらへ？」

「国会議事堂に向かってくれ。初日の目的地だ」

「山村君！すごい反応！国会議事堂からよ！四十万k tもあるわ」

「それだ！急いでくれ！」

「はい！」

車のV気筒エンジンがうなりを上げて加速する。首都高の渋滞も無きがごとく黒い排煙をまき散らしながら国会議事堂へと向かった。

「着いたな。谷沢、詳細な場所は？」

「国会議事堂から霞ヶ関合同庁舎三号館へと向かう道路のど真ん中よ」

「その道路は大統領を乗せた車が通るコースだ。通る瞬間に豆腐を

頭にぶつける気だな」

「山村さん！ あれを！」

川本が宙を指さすと二人は一斉にその方角を見る。

「なるほど、考えたな」

道路の両脇には日本と相手国の国旗が掲げられたポールが立ち並び、

「道路を渡るように両脇のポールをひもで結び、豆腐を支えるなんて……」

「大統領を乗せた車が通った瞬間に銃で狙撃してひもを切り、豆腐を落として大統領の頭にぶつけるというわけだな」

「なんて用意周到な暗殺方法なんでしょう。山村さん、どうします？」

「どんな方法であれ、知ってしまえば対処は出来る。我々の勝ちだ」

「そういえば、川本。お前に彼女とか婚約者はいないのか？」

「いませんけど……突然どうしたんですか？」

「いや、お前の前任の川本はプロポーズすると張り切っていたときに殉職したからな……」

「そういえば、僕の前任も川本という名字だったんですね。親戚でも何でもないですけど不思議な縁です。まるで他人とは思えないくらい……」

「そうか、もう一つ質問だが、湯豆腐には絹か木綿か？」

「決まっているじゃないですか。梅豆腐ですよ」

次回梅豆腐編に続く。

抹茶豆腐編

・No Title

抹茶豆腐

「さて、現状を把握しよう……まずは全員いるか確認する。番号！」

「一」

「二」

「む、三人いるはずなのに、二で終わるとはどういう事だ？ 誰が足りない？」

「山村君。あなた自身を数え忘れているわ」

「う……いや、君達が冷静かどうかを試すためにわざとだな……」

「分かったからまずは現状を整理しよう」

辺りを見回せば鬱蒼とした密林。シダのような沖縄ぐらいでしか見られないだろう植生。

日差しも湿気も強く、じっとしているだけでも三人は汗ばんでくるのを感じた。

「先ほどまで俺達は大統領を暗殺するために仕掛けられていた豆腐を処理しようとしていたはずだ」

「だからあれほど豆腐処理班を呼びましよう」と提案したのに、山村君では聞かないんですもの」

「終わったことは仕方がない。あのときどうすれば良かったか、ではなく今からどうするか、だ」

「ちよつと良いこと言ったか思っているでしょう？」

「そして、その豆腐が破裂したかと思ったら俺達は何か渦のような物に巻き込まれた」

「さすが山村さん、華麗なスルーです」

「気付いたらこんなところにいたという訳か。」

我々が気を失っているうちに誰かにここまで運ばれた。

そう考えるのが妥当だろうな」

「果たしてそうかしら、山村君」

「どういう事だ？」

谷沢は先ほどまでいじっていた携帯を山村に突きつけた。山村だけでなく川本ものぞき込む。

「圏外か。だが、それがどうした。こんな山中だ。想定範囲内だろう。いや、我々をここに運び込んだ連中の意図を考えれば簡単に我々が東京に戻ってこられないように……」

「違うわ。圏外なだけじゃない。GPSが探知できてないの」

「GPSが？ それって……」

みるみる川本の顔が青ざめていく。

「川本君は鋭いわね。今、私たちの頭上にGPS衛星が一個もないということが意味するもの。それは、私たちが今いる場所は二〇一〇年の地球じゃない、ということよ」

「ふん、だとしたら何だ？ 我々はタイムスリップしたとか、他の惑星にワープしたとか、異世界に迷い込んだとか、映画や小説のようないことが起きたとでも言うのか？」

「……そうよ」

「科学者の言葉じゃないな」

「私だって認めたくないわ。だけど……GPS衛星が頭上にないことは事実よ」

「谷沢。お前の携帯が豆腐の破裂で故障しただけだ。行くぞ」

「そうね……ちょっと気が動転していたのかも」

山村は落ち込む谷沢の背中をぽんと叩いた。

「気にすることはない。お前はお前なりに現状を把握しようとしたのだから」

「ええ、ありがとう」

「ところで、山村さん。行こうってどこへ行くんですか？」

歩き始める山村の後ろを着いていきながら川本が尋ねた。

「耳を澄ませ」

「「え？」」

谷沢と川本は分からないといった風に顔を見合わせた。

「川を探すんだ。水の音を頼りにな。」

我々が生き残るためにはまずは水と食料が必要だ。川はその両方を手に入れられる」

「なるほど」

「それに川筋は道になっていることが多い。下流に向かっていけばそれなりの街に出る。運が良ければ駅があるかもしれん」

「さすがです！」

川本は目を輝かせて山村を見ていると、歩き始めた三人の前を豆腐が横切った。

「山村さん。今の……」

「目の錯覚だ」

「山村君。でも、豆腐が動い……」

「谷沢、君は疲れているんだ。幻覚を見るほどに」

「え？ 山村さんも見えて……」

「目に入った埃だ」

「ばあ！」

木の陰から豆腐が飛び出してきた上に三人を脅かすように叫んだ。

「キーホー！ お前らこんなところでなにやってんの？」

「山む……」

「幻聴だ」

「どうやら異世界に来てしまったというのが正解かしら……」

谷沢は思わず半笑いして、ため息をついた。

「異世界に来てしまったなど認めん。」

分かった。これは最新技術で作られたしゃべる豆腐だ。良いではないか。ちょうど食糧が確保できそうだ」

「食料？ 食料？ オイラ？ それでもオマエラ？」

「豆腐のくせに、俺達人間様を食べようというのか？」
ぐつと握り拳を作って構える。

「お前達は手を出すな。この豆腐は俺一人で片付ける」

「山村君……」

「心配はいらない。三十秒で十分だ」

「違うの。あれは卵豆腐だから私じゃないわ」

「な！ 卵豆腐が嫌いだったのか」

「キーホー！ 卵豆腐が嫌いだなんて信じられないホー！ 食べよ

ー！ 美味いホー！」

「食うのか食われるのかはつきりしろ！ は！」

見事なストレート一発！ それで全ては終わった。

「ふ、三十秒もいらなかったか。今夜の晩ご飯を確保してしまった」

「だから私は食べないって」

「僕は頂きます！」

「なぜ、卵豆腐を食べない」

「卵アレルギーなのよ」

「ほんは……ほんはひいひいひい。ほっはいはい」

「川本……俺の分は？」

「え？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8151i/>

湯豆腐は絹か木綿か

2010年10月8日11時53分発行